ISSN 1349-5135

Dialogue

Vol. 21

TALK

Tanabe Applied Linguistics Kenkyuukai

（田辺英語教育学研究会）

Dialogue 21 巻頭言

話題力

松坂ヒロシ

海外の友人たちと時々メールで世間話をして、ずいぶん英語表現を覚えました。ペットの犬のケガの話題に関して、pad（足の裏の肉）を覚えました。近所に立っている damson tree（damson はスモモの一種）への言及もありました。果物を one punnet（果物を詰める箱のことのようです）買った、という内容もありました。雨不足への対応のために、hosepipe ban（ホースによる水の使用の禁止）が出た、とか、暑さで鉄道のレールが buckle した（曲がった）、とかの表現にも接しました。

こうした英語表現に触れながら、あることを思いました。

私が上に列挙した表現は、いずれも特定の話題にヒモづけされた形で私の目に飛び込んできました。そのたびに私は、その話題で英語でコミュニケーションしたことはなかった、と気づかされました。たとえば、犬のケガの話をそれまで誰とも英語でしたことがありませんでした。

われわれ日本の英語学習者の多くにとり、学習上の大きな格闘相手は単語です。未知の語に遭遇するたびに、「ああ、この単語は知らなかったな。まずい、まずい。」と思い、何だか後ろから追われているような心持になります。しかし、今述べた話の「単語」を、「話題」に置き換えたとすると、どうでしょうか。単語に関して抱く危機感や焦燥感を、話題の守備範囲に関してはさほど抱かない人がほとんどだと思います。それがコミュニケーション能力の重要な一側面であるにもかかわらず、です。

その理由を、私はこう想像します。単語力は数で表すことができます。学習者は、その数の物差しで測ったときの自分の不十分さといつも向き合わなくてはなりません。（単語は無数にあり、さらに、毎日新語が生まれているのですから、単語力において不十分でない学習者などいないはずです。）

一方、話題の豊かさのほうは、数量化できません。扱える話題が乏し

い学習者は、その事実を数字で目前に突きつけられることがないために、自分の現状に気づかずにいる恐れがあります。友人たちとのやりとりを通して私が思ったことは、まさにこのことでした。自分がこれまで単語力に気を取られていて、「話題力」とでも呼ぶべきものに対して目を向けていなかったことに、はっと思い至りました。

では、話題力増強の方法は何か。ひとことで言えば、勉強において通常は重視される、秩序、体系といったものを、思い切って忘れることではないか、という気がします。数では数えられない、つかみどころのない生き物である「話題」なるものを相手にするためには、われわれ学習者は、空腹な雑食動物になるしか道がないように思います。会話であれ、メールであれ、放送の視聴であれ、読書であれ、映画鑑賞であれ、とにかく、自分が出会う英語による能動的または受動的なコミュニケーションの機会を、等しく、選り好みをせず、軽重をつけず、すべて掛け替えのないありがたいものとして残らず受け止める包容の姿勢――これこそが、いかにも無原則な学習態度のようではありますが、結局は効果を生むのではないでしょうか。

話題力と一体になって初めて、学んだ単語や表現の知識が伝える力として命を得ます。言葉は真空の中にあるのではない、という初歩の言語学の授業で習うようなことを、私自身、ひとりの英語学習者として常に胸に刻んでおくべきだと思いました。

お詫びと訂正：本誌 14 号の本欄 4 行目の「解放」は「開放」の誤りでした。お詫びして訂正いたします。松坂ヒロシ

目　次

《実践報告》

リテリングを用いた授業内スピーキングテスト

The Retelling-Style Speaking Test in a Classroom Setting

杉内 光成 …… 1

2022 年度 研究会報告 …… 13

規 約 …… 35

投稿規定・執筆要項 …… 39

実 践 報 告

Dialogue, Vol. 21, pp. 1-12
Copyright © 2023 TALK
ISSN 1349-5135

リテリングを用いた授業内スピーキングテスト

The Retelling-Style Speaking Test in a Classroom Setting

杉内光成
獨協埼玉中学高等学校

Abstract

This paper reports the retelling-style speaking test conducted in a classroom setting. Many previous studies claimed the significance of speaking tests to assess and investigate students' speaking ability and showed that retelling could be one of the effective teaching methods to enhance students' speaking ability in a classroom setting. However, there is no previous study to focus on retelling-style speaking tests corresponding with what teachers have taught in the classroom. By referring to Sasaki (2020) and Ushiro (2009), retelling-style speaking tests were made and conducted for 2nd grades of senior high school. The report found significant gaps among classes from the average test scoring rate perspective. However, retelling-style speaking tests' washback was significant for students and teachers. As for the pedagogical implications, it is expected that students will likely change their attitude toward daily English classes. In addition, teachers can reflect on how they teach students English.

キーワード:　リテリング,　スピーキングテスト

科目名	コミュニケーション英語Ⅱ
対象者とクラス人数	2022 年度高校 2 年生 325 人
学習の目標	現実世界に関連した教材の英文を通して、英語で読む力・聞く力・書く力・話す力という 4 技能の能力を養う。

1. はじめに

現在、学校教育の中で英語を学んでいる子どもたちは、グローバル化やAI技術の急速な発達などにより、情報化やグローバル化が進展する社会を生きていくことになる。このような時代に、子どもたちは世界共通語として位置づけられている英語で自分の考えを発信したり、情報を整理して伝えたりする能力が求められるようになった。平成30年8月に告示された高等学校学習指導要領外国語編には、英語の授業の目標は「情報や考えなどを的確に理解したり適切に表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力（p. 155）」を育むことであるとされている。そのための言語活動の一つに「話すこと」があるが、これは「やり取り」の中で話すことと、人前などで「発表」するために話すことに分けられている。英語での「やり取り」とは、ある話題について相手に対して考えなどを話して伝え合うことを意味し、相手に対応しながら会話をすすめていくことが想定されるので、即興性が求められる。一方、「発表」とは情報や考えなどを論理性に注意しながら伝えることを意味しているので、ある一定の時間に何を話すかを準備することが求められる（文部科学省, 2018）。

学習指導要領で求められる能力を学習者が身につけられているかどうかを確認するための作業の一つとしてテストがある。以前は実施されることの少なかったスピーキングテストだが、「話すこと」を評価することが頻繁に行われるようになり、近年広まりつつある。

1.1 スピーキングテストの現状

スピーキングテストの導入には、様々な動きが散見される。スピーキング能力を測ることの重要性が高まり、2020 年度の高校 3 年生から英語の民間試験の導入が計画されていたが、新たに実施された大学入学共通テストで英語の民間試験は導入延期になった。また、高校受験では、2022年度都立高校入試でスピーキングテストが実施されたり（中垣, 2021）。大学受験においては、国公立大学の二次試験においてスピーキング力の一端を測るテストを、条件付きで課すことが提案されている（廣江, 2022）。

では、学校で行われているスピーキングテストについてはどうであろうか。根岸（2017）は、近年実施されているスピーキングテストの問題点として、他の技能（「読むこと」「聞くこと」「書くこと」）のテストに比べて、教師がスピーキングテスト作成について知識や経験が乏しいことを挙げている。さらに、スピーキングテストの内容と採点という観点から分析していく必要があるが、指導者であり採点者である教員自身が分析するための術を知らなかったり、そのための時間を捻出できなかったりする。また、形式についてもダイアローグなのかモノローグなのか、実際のコミュニケーションの場面に基づくのか、ロー

ル・プレイなのかなど、どのようなスピーキング能力を測るのかによって決めていかなくてはいけない。

最後に、学校で行われるテストで忘れてはならないのは、「教科書を通して育もうとした英語力」が身についているかどうかを測るという側面と、生徒へ与える影響のバランスである。定期テストや小テストなど学校で生徒に対して行われるテストは、生徒の学習への影響が大きいと考えられる（根岸, 2017）。よって、「教科書を通して育もうとした英語力」を測るために、生徒にとって全く初見のテストを行なうことは、学校の成績に関係するのであれば、よくも悪くも様々な「波及効果」を生じさせてしまう可能性があることを念頭に置きながらテストの作成ならびに実施をしなくてはならない。

1.2 リテリングの可能性

指導とテストの一貫性や採点のし易さ、生徒への波及効果などの問題を解決する指導法の一つとして、リテリングが有益であるとされている（卯城, 2009; 佐々木, 2020）。リテリングとは、佐々木（2020）によると「読んだり、聞いたりしたことを、何らかの補助的なメモ等を見ながら、第 3 者に伝えること（p. 3）」であると定義されている。卯城（2009）は、このリテリング指導とそれに関連する評価の利点として、まずシンプルかつ学習者に親しみやすいにもかかわらず、技能統合型の活動であるのでスピーキングを中心とした統合的な能力を測ることができることを挙げている。また、リテリングには様々な種類があり、学習者のレベルに応じて形式や方法を自由に変化させることができることにも言及している。さらにリテリング活動を通して、リーディング活動にも肯定的な影響を及ぼすことが期待できるとされており、統合的な能力の育成を目指す指導の 1 つとしても可能性を秘めている。

2. 先行研究と実践の目的

2.1 先行研究

リテリングの形式を用いたスピーキングテストは、すでに多くの学校現場で実践されており、様々な形で導入、研究されている（佐々木, 2020）。

平井（2011）は中高大のクラスにおいて、簡単に使用でき、実用性のあるリテリングを用いたスピーキングテストの研究と開発を試みた。このテストの特徴として、妥当性を確保しつつ、初級者のスピーキング能力を測定できる点を挙げている。さらに、さまざまな熟達度レベルを評価するために、EBB（Empirically derived, Binary-choice, Boundary-definition scales）を採用し、教員が生徒のパフォーマンスを一度聞く間に採点

できる高い信頼性のある評価尺度を完成させた。

また、平井（2015）ではストーリーリテリング・テストのバリエーションとその目的、ならびに実施手順を紹介している。ストーリーリテリング・テストの基本バージョンの手順として、以下の方法を紹介している。

Step 1. 提示されたストーリーを 2 分間で黙読する。
Step 2. ストーリーの内容に関する 3、4 個の問いに口頭で答える。
Step 3. テスト用紙を裏返し、キーワードを見ながら 1 分 40 秒で再話する。
Step 4. 再話の最後に、50 秒間でそのストーリーの内容やトピックに関して感想や意見を述べる。

（平井, 2015, p. 56）

また、上記の基本バージョンに加えて、「音読バージョン」、「ターゲットありバージョン」、「意見交換バージョン」、「要約バージョン」を紹介している。

佐々木（2020）では、リテリングに関する 3 つの研究を紹介して、そこからリテリング指導に生かせることや、リテリング活動が学習者にどのような影響を及ぼしているかについて考察している。まず、リテリングを長期間行った情意面の変化について研究では、リテリングに対する動機の上昇が見られ、学習者の情意面に肯定的な影響を及ぼすことが報告されている。IC レコーダーを活用したスピーキング研究では、IC レコーダーを活用してリテリング指導を行ない、スピーキングにおける流暢さが高まることと、スピーキングに対する情意面に肯定的な影響を及ぼすことを示唆している。さらにリテリングを日本語で行う効果についての研究では、英語による筆記リテリングを行う前に、日本語による筆記リテリングを行うと、意味のまとまりであるアイデアユニットと総語数の両方において伸びが見られ、このことから日本語による筆記リテリングは英文筆記再生課題において肯定的な影響を及ぼすことが示唆できるとしている。

このように、上記の先行研究から、リテリングを用いたスピーキングテストは、テストの妥当性を確保しつつ、様々な熟達度レベルの学習者を対象にしてテストを実施でき、流暢さや情意面に肯定的な影響を及ぼすことが示唆されている。しかし、上記の研究で用いられたリテリング・テストは、生徒にとっては初見の内容を扱ったものであり、授業で学んだ題材と関連させた内容リテリング形式でテストをする研究はあまり散見されない。

2.2 実践報告内容

本実践報告では、授業の内容と一貫性を持ったリテリングを用いたスピーキングテスト

について、作成過程・実施方法・その結果という 3 点について報告する。

3. 授業の内容と一貫性を持ったリテリングスピーキングテストの作成の過程

3.1 使用教科書

コミュニケーション英語Ⅱで使用した教科書は *Revised LANDMARK English Communication* Ⅱ（啓林館）であり、10 個の Lesson で構成されている。本教科書は車いすテニスの国枝慎吾選手についてや、なぜ人は人を好きになるのかという身近なトピックから、硫黄島の戦いやサグラダ・ファミリアという日常生活とは離れたものなど多様なジャンルの英文を扱っている。本スピーキングテストは、Lesson 8 Edo: A Sustainable Society で実施した。Lesson 8 は江戸時代の生活において自然と実践されていた 3R（Reduce, Reuse, Recycle）に着目し、現代を生きる私たちにできることは何かを考えさせる内容となっている。

3.2 生徒

本スピーキングテストは高校 2 年生 9 クラス 325 名に実施した。生徒は全員日本での英語教育を受けており、帰国子女はいない。9 クラスのうち、1 組から 5 組は他の中学校から高等学校に入学した生徒（外部進学生：外進）で構成されており、1 組は外進の中から学業成績上位の生徒が選抜されたクラスである。6 組から 9 組は中学校から高等学校に内部進学した生徒（内部進学生：内進生）で構成されており、6 組は内進の中から学業成績上位の生徒が選抜されたクラスである。7 組から 9 組は 3 クラスが 4 分割され、7 組から 9 組の中で英語の成績上位者で構成された「789A クラス」と、A クラスに所属していない 7 組の生徒のクラスを「7 組 B」、A クラスに所属していない 8 組の生徒のクラスを「8 組 B」、A クラスに所属していない 9 組の生徒のクラスを「9 組 B」としている。

3.3 教員

本スピーキングテストは高校 2 年生対象のコミュニケーション英語Ⅱを担当している 5 名の教員で実施した。教員 A は教歴 11 年目で 2 組・5 組・6 組・8 組 B を担当しており、本科目のチーフを務めている。また、8 組のクラス担任でもある。教員 B は教歴 19 年目であり、1 組・4 組・7 組 B を担当し、4 組のクラス担任でもある。教員 C は教歴 5 年目で 3 組を担当しており、3 組のクラス担任でもある。教員 D は教歴 12 年目であり、9 組 B を担当した。教員 E は教歴 10 年目で 789 組 A を担当した。

3.4 リテリングを用いたスピーキングテストまでの授業

本スピーキングテストを行なう前に、以下の流れを中心として授業を行った。なお、リテリング活動は、全ての Part で行なったわけでない。また、リテリングを行なった際は、以下の指導手順の（7）Activity で行なった。

（1）Warming Up
（2）Review
（3）Oral Introduction
（4）Model Reading
（5）Explanation
（6）Reading Aloud
（7）Activity
（8）Consolidation

Lesson 8 は 5 つの Part で構成されていたが、リテリングを用いたテストに至るまでの指導計画が以下の通りである。

1 時間目 Part 1
2 時間目 Part 2
3 時間目 Part 3
4 時間目 Part 4 前半
5 時間目 Part 4 後半
6 時間目 Part 5
7 時間目 Retelling 活動
8 時間目 文法の復習
9 時間目 スピーキングテスト

3.5 スピーキングテストの内容

本スピーキングテストは、2 つの Questions から構成されている。1 つ目の Question では、教科書の挿絵を提示されたキーワードを使って説明するものである。これは、授業で学んだ内容を表している挿絵について、複数のキーワードを使いながら英文を作りあげて説明できるかをテストするための Question である。なお、キーワードは教科書出版社が作成した副教材データ（リテリング・シート）に明示されているキーワードの中から、授業担当で打合せをして抽出した。2 つ目の Question は、テストカードで指定されたパートに関連した質問に対して、自分の立場を表明し、その理由を述べるものである。なお、本スピーキングテストの形式は、佐々木（2020）を参考にした。

本スピーキングテストでは、Part 1 に関連したテストカードを 1 枚、Part 2 に関連したテストカードを 4 枚、Part 4 に関連したテストカードを 2 枚、Part 5 に関連したテストカードを 2 枚作成した。なお、Part 3 は挿絵とそれに付随するキーワードがリテリングを用いたスピーキングテストをする題材として、他の Part に比べて適切ではないと判断したため、テストカードを作成していない。

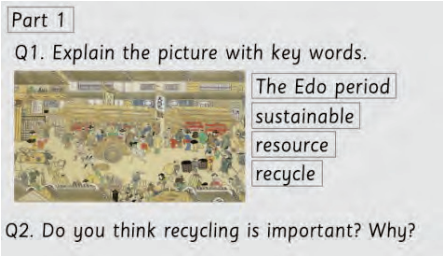
次に Lesson 8 の Part 1 の本文と、そのスピーキングテストを紹介する。

資料 1

Part 1 の教科書本文と Speaking Test で使用するテストカード

In Japan we throw away about 500 million tons of garbage per year, a tenth of which comes from households and offices. It means that we throw away about one kilogram of garbage for each person per day. In a society of mass production and mass consumption, we throw away a huge amount of garbage. In the near future, the day may come when we will have to live buried in garbage.

If you are interested in environmental problems, you may know the expression “3Rs.” It means Reduce, Reuse, and Recycle. It has been popular since it was introduced as the Basic Law for Establishing a Recycling-Based Society in 2000. Today, not only in Japan, but in other parts of the world, numerous measures have been taken to pursue a sustainable society. Surprisingly, people in the Edo period (1603-1867) actually achieved such a society. At that time, almost every resource was recycled, which reduced damage to the environment to a minimum.



（画像は *Revised LANDMARK English Communication* Ⅱより引用）

4. 授業の内容と一貫性を持ったリテリングスピーキングテストの実施方法

本スピーキングテストは、埼玉県内の私立中高一貫校において、高校 2 年生の必修科目であるコミュニケーション英語Ⅱの授業内（50 分間）に、2022 年 11 月 22 日から 30 日にかけて 9 クラス 325 人を対象に行われた。生徒は事前にスピーキングテストの内容は知らされておらず、スピーキングテストの実施日のみ告知されている。

50 分の授業の中で、以下の流れにしたがって実施された。なお、テストは教室近くの廊下で実施し、生徒のパフォーマンスは各生徒が所持している Chromebook で撮影した。

（1）Sample のスライド（資料 2 の 1 枚目）を見せながら、Speaking Test の方法を説明。
（2）Lesson 8 Speaking 評価のスライド（資料 2 の 2、3 枚目）を見せながら、評価方法

を説明。

（3）生徒を 2 グループ（前半・後半）に分割し、各グループ内で 2 人 1 組を組ませる。

（4）Speaking Test におけるパフォーマンスの撮影のポイントを説明。

（5）前半のグループが廊下に出て、1 人目に Test Card（資料 1）をランダムに配布。後半のグループは教室で待機。

（6）1 人目は Test Card を見ながら 1 分間準備。ペアのもう一人は撮影の準備。

（7）1 分間 Speaking Test のパフォーマンスを撮影。

（8）Test Card を教員に返却。もう片方の生徒が（5）から（7）を行う。

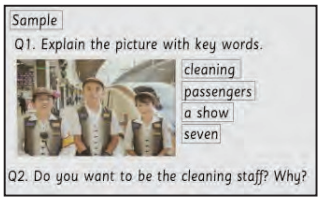
（9）もう一人のテストが終了したら、後半のグループと交代。

（10）後半のグループも（5）から（8）を行う。

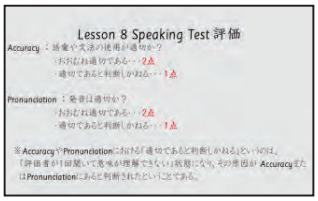
資料 2

生徒に Speaking Test を説明した際に使用しパワーポイントのスライド

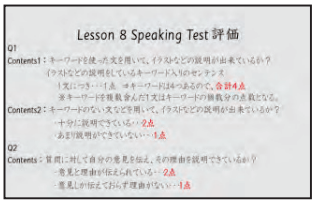
1 枚目



2 枚目



3 枚目



（画像は *Revised LANDMARK English Communication* Ⅱより引用）

パフォーマンステストする際は、大きな声で、顔を出来るだけ近づけ、テストカードを見せながら行うように指示をした。この指示により、撮影しても声があまり聞こえないことや、どのテストカードのテストをしているのか分からない状況を回避することができる。

4.1 スピーキングテストの評価方法

本スピーキングテストで撮影した動画データは、Google Classroom というアプリケーションを通じて回収し、評価は次のルーブリック評価表（表 1）に基づいて行なった。なお、作成にあたっては佐々木（2020）、卯城（2009）を参考に筆者が作成し、その後、コミュニケーション英語Ⅱを担当する教員で打合せを行なった。

表 1

ルーブリック評価表

	4 点	3 点	2 点	1 点	0 点
Q1: Contents① キーワードを使った文を用いて、イラストなどの説明が出来ているか。	4 文以上ある。	3 文ある。	2 文ある。	1 文ある。	センテンスがない。

	2 点	1 点	0 点
Q1: Contents② キーワードのない文などを用いて、イラストなどの説明が出来ているか。	十分できている。	あまりできていない。	説明がない。
Q2: Contents 質問に対して自分の意見を伝え、その理由を説明できているか。	意見と理由が伝えられている。	意見しか伝えておらず理由がない。	質問に答えていない。
Accuracy 語彙や文法の使用が適切か	おおむね適切である。	適切であると判断しかねる。	英語の内容が理解できない。
Pronunciation 発音は適切か	おおむね適切である。	適切であると判断しかねる。	英語の内容が理解できない。

Q1 は Contents の観点を 2 つに細分化した。Contents①はキーワードを使った文を用いて、イラストなどの説明ができているかを評価した。一方、Contents②はキーワードのない文などを用いて、イラストなどの説明ができているかを評価した。このように 2 つに分けたのは、キーワードを用いた文のみでリテリングをすることはできず、発話に流れを作ろうとするとキーワードのない文も必要となり、そのような発話も評価をすべきだと考えたからである。

Q1: Contents①において、キーワードを複数含んだ 1 文はキーワードの個数分の点数となる。Accuracy や Pronunciation における「適切であると判断しかねる」というのは、「評価者が 1 回聞いて意味が理解できない」状態になり、その原因が Accuracy または Pronunciation にあると判断されたということである。

実際にスピーキングデータを評価する前に、評価規準を確認し評価者によって誤差が出ないように、実際のスピーキングデータをいくつか用いて、スコアをつけて目線合わせを行なった。

5. 授業の内容と一貫性を持ったリテリングを用いたスピーキングテストの結果

リテリングを用いたスピーキングテストを以下の表 2 にまとめた。なお、テスト当日に欠席をした生徒は後日再テストを実施したが、再テスト受験者のスコアは除いて平均得点率を算出した。本実践報告における平均点得点率とは、12 点（本スピーキングテストの満点）を 100%として、クラスの平均点を百分率で表した数値である。例えば、平均得点率が 50.0%ならば、クラスの平均点は 6.0 点ということになる。

表 2

スピーキングテストの平均得点率

	1 組	2 組	3 組	4 組	5 組	6 組	789A	7B	8B	9B
人数（人）	35	33	30	31	33	41	25	29	23	28
平均得点率（%）	74.5	74.7	69.6	66.7	65.4	73.4	77.5	52.2	50.0	35.3
標準偏差	1.38	2.22	1.86	1.79	2.12	2.40	1.49	1.63	2.04	1.63

平均得点率が一番高かったのは、789A の 77.5%であった。次に高かったのは、2 組の 74.7%で、1 組の 74.5%とほぼ同等の得点率である。6 組は 73.4%であり、平均得点率が 70%を超えたのは、この 4 クラスのみであった。平均得点率が 60%台であったのは、3 組の 69.6%、4 組の 66.7%、5 組の 65.4%である。50%台は 7B の 52.2%と 8B の 50.0%であった。9B は 35.3%しか平均的に得点をあげることができていなかった。

6. 考察

このスピーキングテストの結果は、部分的にではあるが、普段の定期試験などの成績と比較してみると、同じような結果になっている。例えば、定期試験では 1 組と 6 組の成績が高く、7B、8B、9B の成績が他クラスよりも低い傾向にあり、スピーキングテストの結果からも同様なことが言える。このような結果になった理由の一つとして考えられるのが、リテリングを用いたスピーキングテストは「学んだ英文の理解度」をスピーキングという形式で評価しているということである。まず、リテリングを行うためには授業で扱われた英文の内容や語彙、文法などを理解していることが必要である（卯城, 2009）。1 組から 789A は毎回の定期試験において、この点に関しては問題なく取り組めているが、7B から 9B は教科書本文の理解が十分にできない生徒が一定数いる。そのような状況でリテリングとい

う形で学んだ英文の理解度を評価されても、十分なパフォーマンスができない。

一方、2 組と 789A の定期試験の成績は 1 組や 6 組よりもやや劣る傾向にあるが、スピーキングテストでは同等レベルの結果となっている。これは、2 組や 789A にスピーキング形式のパフォーマンスに慣れている生徒が一定数いることや、そのような生徒がいることによって、「英語を話すことは恥ずかしいことではない。素晴らしいことだ」などという雰囲気をクラスに創り出し、良い波及効果を与えているのではないかと考えられる。

7. 本実践から得られた効果と今後の課題

本実践から得られた効果としては、まず、英語の授業に対する生徒のモチベーションの向上である。授業の内容と一貫性を持ったスピーキングテストだったので、テスト後に「もっと授業をしっかり受ければよかった」や「音読などの活動をもっと練習しておけばよかった」という感想が聞かれ、今後の授業に対する姿勢への良い影響が期待できた。根岸（2017）では、テストの波及効果について言及しているが、本実践においては、生徒にとって自身の英語学習の方法について振り返る有意義な機会になったことが推察される。

つぎに、教員が自身の授業について振り返る機会となったことである。本実践を行った科目も担当者は筆者を含めて 5 名であるが、スピーキングテストの結果を踏まえて自身の授業について真剣に振り返っていた。学校で行われるパフォーマンステストでは、事前に生徒にテストの内容を知らせて、生徒は事前に原稿などを準備して暗記するというケースが少なくはないと思われるが、本実践ではテスト内容が分からないまま生徒はスピーキングテストを受けることになるので、リテリングを用いたスピーキングテストという形で授業の理解度を確認することができた。以下は、各教員の本スピーキングを実践したことに対する雑感である。

〈教員 B〉

以前は事前にお題が知らされていたため、多くの生徒が翻訳アプリ等を使いながら暗記した文章を話したり、書いたりしていて、それを評価することに疑問を抱いていました。即興で speaking と writing のテストを行うことになり、彼らのよりリアルな英語をみることができて良かったと思います。生徒達には普段から自力で英語を考える大切さを実感して欲しいです。

〈教員 C〉

生徒の理解度をよく見ることができた。普段の授業でリテリングをしていても、サマリーをがっつり見ている生徒はやはりできていないなと感じる。生徒がどのように普段の授

業に取り組めば良いかのゴールがしっかりと見えたように思う。

〈教員 D〉

即興での発表活動に関しては、とにかく Broken な英語でも良いので発言しようとする生徒が多く見受けられた。授業の初めにいつもペアワーク・グループワークを行っているので、それらの活動とテストが上手く絡んでいけるように指導していくことが大切だと感じた。

〈教員 E〉

公平性、授業の理解度を見ることができるので良いです。担当する先生の準備は大変だと思います。

今後の課題としては、リテリングを用いたスピーキングテストとリーディングテストの結果の相関関係を探っていきたい。卯城（2009）によると、リテリング指導が深い読解につながる可能性を示唆しており、リーディング能力の向上が期待できる。またリテリング指導の形態とスピーキングテストの結果のつながりは、見過ごすことのできない点である。リテリング指導という枠組みにも、佐々木（2020）が示すように様々な指導方法がある。どのような教材にはどのようなリテリング指導が適切か、またはリテリング指導が適切な教材はどのようなものであるのかなど、テスト結果と絡めた実践を報告していきたい。

参考文献

卯城祐司（2009）『英語リーディングの科学―「読めたつもり」の謎を解く』 研究社.

啓林館編（2018）『Revised LANDMARK English Communication Ⅱ』.

佐々木啓成（2020）「リテリングを活用した英語指導―理解した内容を自分の言葉で発信する」 大修館書店.

中垣芳隆（2021）「高校入試に「英語スピーキングテスト」」『大阪女学院大学・大阪女学院短期大学教員養成センター〈英語教育リレー随想〉』, *123*, 1.

平井明代（2011）「学習へのプラスの波及効果を生む実用的スピーキングテストの研究・開発」 科学研究費補助金研究成果報告書.

平井明代（2015）「授業を活かすストーリーリテリング・テストの活用」『OTSUKA FORUM』, *33*, 49–69.

根岸雅史（2017）『テストが導く英語教育改革「無責任なテスト」への処方箋』 三省堂.

廣江顕（2022）「個別学力検査におけるスピーキングテストの導入」『長崎大学教育開発推進機構紀要』, *12*, 24–31.

文部科学省編（2019）『中学校学習指導要領（平成 30 年告示）解説　外国語編』.

研 究 会 報 告

2022 年度　第 1 回研究会（TALK TIME）

英語教育 情報交換会

日　時：　2022 年 4 月 23 日(土) 17：15〜19：00
会　場：　オンライン ZOOM 開催

【概　要】

1 人当たり 10−15 分ぐらいで英語教育に関する「オススメ図書」について、ざっくばらんに紹介プレゼンをしていきます。発表は必須ではなく発表を聞くだけの参加だけで大歓迎です。

【発表者後記】

おすすめ図書：佐藤雅昭.（2013）.　『流れがわかる英語プレゼンテーション』
英語プレゼンテーションへの不安を軽減させてくれる一冊。「黄金の 7 行ルール」など英語スライドを作る際のコツは必見です。　【肥田和樹】

おすすめ図書：『小学校英語指導者のポートフォリオ』J-POSTL エレメンタリー教職課程における活用実践』
http://www.waseda.jp/assoc-jacetenedu/J-POSTLE_KyoshokuKatsuyo.pdf
私が編集者の一人となり、科研費を使って web 上での掲載と印刷を行いました。当日は、教職課程における小学校外国語指導法で目指す理想とその現状をごく簡単にお話しました。安田さんから「校務分掌などにも英語教師のやりがいがあるのではないか」とコメントを頂きまして、教職課程履修生にそのような視点でも折に触れる必要性を感じました。
【山口　高領】

おすすめ図書：H・リン・エリクソン，レイチェル・フレンチ，ロイス・A・ラニング（2020）.『思考する教室をつくる概念型カリキュラムの理論と実践―不確実な時代を生き抜く力』
国際バカロレアの教育手法の中核となっている「概念型学習」の理論と具体的な「概念型カリキュラム」に基づく授業計画，単元設計や評価方法を学ぶことのできる教科書的な 1 冊。

教科内容を教えるとともに，学習者の批判的，創造的，概念的思考力を涵養するための指針を示す１冊だと思います。【安田明弘】

おすすめ図書 : David Crystal.（2017）. Making Sense － The Glamorous Story of English Grammar. PROFILE BOOKS LTD.

David Crystal の sense of humor が魅力的な、読んでいて楽しい本です。英語史と（たぶんお子さんの）小さな Suzie の文法習得の経過の物語や、英国の学校での文法指導の変遷をたどりつつ、“Clarity and weight”，“Clarity and order”や semantics, pragmatics, style 等が文法と密接に魅力的に関わっていることを語ってくれています。翻訳書（下記）が『英語教育』で紹介されていて知った本です。

デイヴィッド・クリスタル著、伊藤盡・藤井香子訳『英文法には「意味」がある』大修館書店. 2020 年【望月眞帆】

『TOEIC 公式 e ラーニング 基礎編 L&R』と大学生向け読解ストラテジーテキストの開発

発表者：　湯舟 英一 氏［東洋大学］
司会者：　山口 高領 氏［秀明大学］
日　時：　2022 年 5 月 21 日(土) 17：15～19：00
会　場：　オンライン ZOOM 開催

【概　要】

『TOEIC 公式 e ラーニング 基礎編 Listening & Reading』（IIBC より 2021 年 10 月 19 日発売）は、テスト開発機関の ETS が本番のテスト制作と同じプロセスで作成した問題（公式問題）を搭載し、言語習得の土台となる基礎学習スキルを動画形式で紹介したのち、鍵付きのレッスン構成で、＜例題を解く→例題解説（動画講義）→問題演習＞のラーニングパスを経て、TOEIC L&R のパートごとに基礎スキルを学びます。また、初中級者の動機付けを促進する仕掛けとして、進捗に応じて獲得できる 5 種のアチーブメントメダル、スキマ時間用の学習コンテンツや、学習進捗を可視化できる仕組みを導入しています。また管理者機能でも、学習者の進捗をグラフや表で確認でき、学習を促す自動送信メール機能を搭載しています。 発表では、この教材の中心的トレーニングである「チャンク・イメージング」や「チャンク音読」の概要や学習理論背景、2021 年度秋学期に導入した授業での TOEIC スコアや読解速度の事前事後効果測定などについても触れたいと思います。

一方、時間に余裕があれば、今年 2 月に刊行した大学生向け英語読解ストラテジー教材について簡単にご紹介できればと思います。この教材は、パラグラフレベルでの 7 つの読解ストラテジーと 6 つのパラグラフ構造パターンの理解に基づいて、グローバル情報社会に関する話題の短いパッセージを読む演習を通して、「読む」スキルを中心に「聞く」「話す」「書く」のスキルを統合的に習得することを目的とした大学生向け英語教材です。他教材との差別化ポイントや教材開発の最近のトレンドなどについてもお話できれば幸いです。

【司会者後記】

オンライン教材『TOEIC 公式 e ラーニング 基礎編 Listening & Reading』のお話を通じて、緻密に設計された様々な工夫を感じました。その一つは、問題演習に進むためには、動画解説を視聴することが求められるというもので、まるでロールプレイングゲームをしているかのようでした。また、全文ディクテーションではなく、部分ディクテーション課題を多く実装している点にも、このオンライン教材の良さがあると感じました。言語音声からイメージ化を促し、自動化までを求めるという方針にも強く共感しました。私は、英語音声のあとにイラストや写真をふんだんにとりいれるともっとよいのではと質問をしたところ、通信回線の現状ではなかなか難しいが、5G の時代が到来すればそうしたタスクも可能になるかもしれないとのことでした。このように、今回のお話は、オンライン教材の仕掛けを具体的に学びましたが、これは従来型の対面授業にもすぐに取り入れられるものが多いという感想を持ちました。目標を示しつつも今ある課題を攻略すれば、次のコンテンツが unlock されるということは、学習者に満足感と達成感を持たせる対面授業での配慮に通じるものがあります。全文ディクテーションは時間がかかり、学習ターゲットがぼやける可能性がありますが、部分ディクテーションであれば、効率よく授業が進みます。音声を聞かせて、その内容のイメージに近いものを選ばせるというタスクは、パワーポイントなどを使えば授業が活性化するはずです。参加者全員から意見をいただき、オンライン教材からオフライン教材・学習・指導を考えさせる貴重な TALK となりました。

【文責：山口高領】

国際バカロレア（IB）の教育諸理論を適用した英語授業実践・教材開発とその評価

講演者：　赤塚 祐哉 氏［早稲田大学 本庄高等学院 ・情報教育研究所］
司会者：　安田 明弘 氏［武蔵高等学校中学校］
日　時：　2022 年 6 月 25 日(土) 17：15〜19：00
会　場：　オンライン ZOOM 開催

【概　要】

発表者は国際バカロレア（IB）で採用されている教育諸理論を適用した英語授業の実施と教材開発を行い、日本の高等学校・大学における英語教育の文脈で実施した場合に想定どおり機能するかどうかを検証してきた。IB プログラムの理念には、国際的視野の育成、批判的思考の育成、創造的な思考の育成等といった複数の方略の実現のために、様々な学習理論の融合により成り立っている（成田 2020）。赤塚ら（2022）では、『逆向き設計論』（Wiggins & McTighe 2005）と『概念型学習』（Erickson 2008）、ブルームら（Bloom et al, 1956, Anderson & Krathwohl 2001 により改訂）による高次思考レベルの問い、そして『多重論理』（Paul 1987）に基づく対話型の学びといった 4 つの学習理論が、学習者の批判的思考を駆動する可能性を示した。本発表では（1）適用した学習理論の概説、（2）学習理論を適用して作成した英語教材の紹介、そして（3）教材の効果測定として行った学習者の批判的思考の深まりに関する研究を紹介する。

【司会者後記】

国際バカロレア（IB）に取り入れられている教育諸理論を非常に精密に紐解き、英語授業・教材開発に取り組まれてきた赤塚先生の足掛け 5 年以上の軌跡をお聞きしているような発表であった。特に IB の「（相手が答えをもっている）質問」でも「（教師が答えをもっている）発問」でもなく「（教師も生徒も答えを知らない）問い」を授業の中で組み込むことの重要性、それらが学習者の高次の思考（Bloom et al, 1956, Anderson & Krathwohl 2001 により改訂）の発達を促すことに繋がる点は今後の教育においてとても大切な視点であると感じた。また、ただ「問い」を投げかけるのではなく、学習者の概念理解を促す『概念型学習』（Erickson 2008）、到達すべき目標から逆算して授業を組み立てる 『逆向き設

計論』(Wiggins & McTighe 2005)、そして異なる意見をぶつけることで対話型の学びが生まれる 『多重論理』(Paul 1987) といった理論をもとに、教師によって意図された目的をもった「問い」を適切なタイミングで投げかける授業・教材デザインの重要性も示唆された。赤塚先生自身が、答えのない「問い」に向き合い続け、常に「リフレクティブ」に理論をもとにした授業・教材を発展させ続けているからこその発表であったと感じた。

【文責：安田明弘】

言語観と英語指導・英語教材

講演者：　松坂 ヒロシ 氏［早稲田大学・秀明大学］
司会者：　久保 岳夫 氏［開成学園 講師］
日　時：　2022 年 7 月 9 日(土) 17：15〜19：00
会　場：　オンライン ZOOM 開催

【概　要】

英語指導が行われたり、英語教材が作成されたりする際、そうした作業の背後に教師や教材執筆者の言語観、すなわち、言語とはこういうものだ、という理解が存在し、その言語観が、教師や執筆者の知らないうちに学習者のアタマに注入される可能性があります。本発表では、発表者自身のこれまでの英語学習、英語指導、教材作成の経験の一端を述べ、言語に関するどのような考え方がその基盤にあったかを振り返ります。発表者が学習者として利用したり教師として担当したりしたＮＨＫの英語教育番組、発表者が執筆者としてかかわった検定教科書などに言及し、一般に、さまざまの英語指導活動が実は大なり小なり教師の言語観の反映であることを例示します。

【司会者後記】

本発表は，　2021 年 12 月の TALK 例会で発表者によってなされた「英語発音指導に関する 20 の主張」と題する発表の中で言及された「教師は言語観を持て」という主張における「言語観」についてさらに考察した内容の発表である。言語観，すなわち「言語とは要するにこういうものだ」という理解には，「言語はルールの体系である」といった伝統的なものから，「言語は場面と一体である」，「言語は社会的いとなみの一環である」といったものまで，実に様々なものが存在するという。どのような言語観であれ，英語教師は，知らず知らずのうちに自分の言語観を自分の教育を通して生徒の頭に注入する可能性があるため，このことの重みをわきまえていなければならない，という考えが冒頭で述べられた。本発表では，こうした言語観について多くの例が紹介され，発表者自身がどのように英語教育と関わってきたのかがよくわかる内容であり，参加者に考察の機会を与える内容であった。以下にその要旨を掲載する。

最初に，発表者が学習者として過去に利用していた NHK の英語教育番組「テレビ英語

会話初級」（田崎清忠氏担当）と「テレビ英語会話中級」（國弘正雄氏担当）に込められた言語観について触れられた。田崎氏の番組は，１つの場面には１つの表現を当てはめ，文法解説はあまりなく，substitution drill に移っていくといういわゆるオーディオリンガル・メソッドに基づいたもので，番組制作の背景には「言語は場面の中から覚えていくものである」，「言語は口を動かして習慣を作って覚えるものである」という言語観を窺い知ることができるのではないかと述べられた。また，こうした言語観は，中学生であった当時の発表者にとっても情意面で大きな安心感を与えてくれたという。

國弘氏の番組では，しばしば英語表現に美しい日本語訳がつけられ，「言葉の理解のベースは母語である」という言語観があったのではないかということが述べられた。また，同番組では，諸分野の専門家をゲストスピーカーとして招いたインタビューコーナーがあり，現在の ESP（English for Specific [Special] Purposes）教育を思わせる内容であったことが述べられた。このことから，同氏が担当した番組は「あらゆることばは何かの分野のことばである」という言語観に基づいて制作されていたのではないかとの考察がなされた。

次に，発表者が携わった NHK の英語教育番組「ラジオ英語会話」（1976-1978 年度: 月〜木：東後勝明氏担当；金・土：松坂ヒロシ氏担当）と「テレビ英語会話Ⅱ」（1985 年度：松坂ヒロシ氏担当）に込められた言語観についての話があった。東後氏の番組は，イントネーションのディスコース上の役割に焦点を当てており，明示的な音声指導を表に出したという意味では画期的な番組であったということが述べられた。番組は「言語の本質は音声である」という東後氏の言語観に基づいて制作されていたのではないかという考察がなされた。

また，発表者が 1985 年度に担当した「テレビ英語会話Ⅱ」では，英語インタビューの完全な transcript がテキストに載せられており，「言語の実態（＝原稿のない状態で話された言い淀みなどを含むことば）を学ばない限り，言語学習は完結しない」という言語観に基づいて制作されていることが紹介された。関連して，不完全な言語形式を修正する能力の重要性についても述べられた。

次に，同じく発表者が担当した NHK ラジオ「英語リスニング入門」（2002-2004 年度）では，番組のスキットの読み上げの録音を吹き込み担当者に自由に自然なスピードで話すよう指示し，くずれた音を含む「音声の実態」に焦点が当てられていたということが述べられた。この番組の制作背景には，「オーラルコミュニケーションにおいてやり取りされるのは，そもそも崩れた音である（くずれていない音など存在しない）」という発表者自身の言語観が存在していることが述べられた。

さらに，発表者が 2015 年に担当した NHK の発音指導中心のテレビ番組「ニュースで英会話プラス」についての話がなされた。この番組の制作は，学問的な発音の精密な分析と

教える際の明示的指導は分けて考える必要がある，という考えに基づいており，「ことばの発音は順序立てて示せば明示的に教えることができる」という発表者の言語観が込められていることが紹介された。

次に，発表者が執筆に携わった英作文の文科省検定教科書『CROWN』(1989 年）には，多くの暗唱用の文章（e.g.「ししおどし」についての英文）が提示されていたことが述べられた。クリエイティブに英語を使う場合でも，すでに覚えている英語を使ったり応用したりすることが多く，執筆背景には「作文力は暗唱によって身につけるべきである」という言語観が込められているという話が紹介された。

次に，発表者が取り組んできたディベート教育に込められた言語観についての話があった。発表者は，ディベートの指導において，主張の背後に隠れている前提をトゥールミン・モデルに基づいて崩していく批判的思考訓練を学生に課していた，という話が紹介された。こうした指導の背景には，「議論力が不十分な者は言語力も不十分である」という発表者の言語観が込められており，議論ができる英語学習者を育てていく重要性についても述べられた。

最後に，英語「指導」ではなく，英語「学習」に関する考察も述べられた。非英語母語話者である英語学習者は，言いたい内容（アナログ世界の存在）を有限の数の表現の可能性から選んだ項目（デジタルな世界の存在）に当てはめながら表現していかなければならず，その選択肢は母語話者に比べてはるかに少ない。よって，言いたい表現を習得していくためには，類義語辞典などを使い，複数の表現を参照するような努力をしないと，コミュニケーションで最適な表現を探していくことはできない，ということが述べられた。

さらに，上記の話と関連し，英語学習の「上級者」に関するコメントが付け加えられた。日本の英語教育においては，初級・中級の指導と異なり，上級者への教育があまり充実していないが，帰国生をはじめとする上級者を扱う場面に立つこともあるので，こうした上級者に教える準備をしておく必要がある，という考えが述べられた。

本発表は，教師が英語を教える際に，知らず知らずに学習者にすり込んでしまっていると思われる「言語観」に関して，参加者に様々な観点から考察を促す大変示唆に富んだものであった。発表後には，何名かの参加者からの質疑がなされ，有意義な意見交換がなされていたように感じる。なお，発表者から「板書において，國弘正雄先生のお名前の漢字が間違っていました。また，第二強勢への言及の際の university の第一強勢をズレた位置に置いてしまいました。以上２点，お詫びして訂正いたします。」とのメッセージが後日寄せられた。

参考文献：

1. Chapman, R. L. (1977). *Roget's International Thesaurus, 4th ed*. Thomas Y. Crowell Company.

2. Gove, P. B. (Ed.). (1973). *Webster's New Dictionary of Synonyms*. Merriam-Webster.

3. Rodale, J. I. (1978). *The Synonym Finder*. Warner Books.

4. Stein, J., and Flexner, S. B. (Ed.). (1984). *Random House College Thesaurus*. Random House.

5. 大野晋、浜西正人. (1985). 『類語国語辞典』角川書店.

【文責：久保岳夫】

TALK 夏合宿

【タイムスケジュール】

14:00―14:50　久保岳夫

本発表では，発表者が現在勤務している中学高等学校で実践している，英語落語動画を利用した「正確に聞き取る活動」に重点を置いた授業実践の一部を紹介しました。英語落語がどういったものかという説明から始まり，教材に設定された場面に関する記憶や語彙・語法・文法の知識を手掛かりにした「英文を正確に聞き取る活動」の一連の流れを紹介しました。英語落語を授業で扱うメリットは高いと考えていますので，同様の授業実践を共有できる先生方が増えていってくれたらうれしく思います。

15:00―15:50　浅利庸子

現在私は，慣用句や定型的言語表現（formulaic sequence）の習得及び使用がどのように英語非母語話者（NNS）の流暢さに関係しているかについて調べています。本発表では，NNS の lexical phrases の使用頻度と種類について報告しました。Lexical phrases は FS の種類ですが，その定義は少し曖昧であるため，夏合宿の参加者には今後，lexical phrases をどのように定義すべきかなどについて相談させていただきました。いただいたコメントは今後の研究に活かしたいと思います

16:00-16:50　安田明弘

本発表では，参加者の皆さまに事前に「学習スタイル診断（Self-Portrait）」を実施して頂き，発表では学習スタイル認定コーチである発表者が，学習スタイルの５つの項目について簡単に説明をし，それぞれの項目について参加者の皆さまの実感や感想をお聞きしました。その後，英語学習における本診断の利用方法や，本診断を英語教育研究にどのように発展させられるかという切り口で参加者の皆さまからざっくばらんな意見を頂いくことができ，とても貴重な機会となりました。

英語教師にとっての「多読」

講演者：　林 剛司 氏［横浜商科大学］
司会者：　久保 岳夫 氏［開成学園 講師］
日　時：　2022 年 9 月 10 日(土) 17：15〜19：00
会　場：　オンライン ZOOM 開催

【概　要】

英語学習において「多読」の必要性を否定する教師や学習者はいないでしょう。言語の習得には大量のインプットが不可欠だからです。しかし、その方法や効果については意見が分かれるところです。教師として多読授業を行う場合には、教授法以前に、まずは教師自身が多読を充分に行い「楽しむ」必要がある、と発表者は考えています。多読を（主に高専や大学での）授業で導入したり、Asahi Weekly 紙上において多読図書を紹介・解説したり（2015 年〜現在に至る）、自分自身の英語学習の一環として多読を実践してきた経験から、多読の重要性、効果、そして（これこそが本発表の要になるかもしれませんが）多読の「魅力」についてお話しします。また、時間が許す限り、学習者や英語教育関係者、連載記事の読者等から寄せられる質問（例「GR と LR の違いは？」「オススメの（人気がある）多読図書とその特徴は？」「辞書や文法訳読は時代遅れか？」「音声面について」…）と発表者の回答も紹介したいと考えています。そこから、発表者の（主に多読を通じての）ささやかな言語観にまで話を発展させることができれば幸いです。

【司会者後記】

本講演では，英語学習における多読（extensive reading）の重要性について，講演者自身の英語教員としての経験，英語多読に関する書籍を出版した経験，そして多くの英書に触れてきた経験を通して，具体的な内容の発表であった。

まず，講演者が高等専門学校で英語を教えていたときに，90 分の授業のうち 15 分を多読活動にあてていたという授業実践の紹介がなされた。多読の授業を実践するためには，図書館の協力が不可欠であることも述べられた。

次に, 講演者が 2015 年から日本の英字紙で連載しているコラムや現在まで出版されている英語多読関連書籍の紹介があった。英語多読に関して潜在的に興味のある一般の読者が多いことが窺える内容であった。

続いて， retold 版の英書には，Leveled Readers (LR)と Graded Readers (GR)の 2 種類があるという話がなされた。LR とは英語を母語とする児童向けの絵本を指し, GR とは (英語が母語でない) 英語学習者用の段階別の読み物を指すということが説明された。LR，GR 共に，異なった出版社から出版されている具体的な図書（e.g. Oxford Reading Tree, Longman Literacy Land Story Street, Oxford Bookworms, Oxford Dominoes）の紹介がなされ，それぞれの特徴が紹介された。GR については，出版社別のそれぞれのシリーズにおける語注についての特徴の紹介・比較がなされ，語注の利用について rewrite を担当している著者の中では「語注はできれば使用してほしくない」といった意見があることも紹介された。

次に，retold 版の作品をいくつか例に取り，どのような表現が使われ，どういった配慮がなされて執筆されているかという話がなされた。学生に，原文で使われている表現と retold 版で使われている表現の違いなどに着目させて英語表現について深く考察させる授業実践なども紹介された。

最後に，近年文学作品が英語教育の現場で以前よりも遠ざけられている実情について言及され,「言語の真髄 (genius, essence) を感じさせるものというのは, やはり文学にある」という國弘正雄氏の言葉が紹介され，retold 版であっても，文学は教育現場で利用する価値が高いということが述べられた。また，すでに日本語で読んだことのある作品の英訳作品を読むことで定型表現（formulaic expressions）にも注目することができ，効果的な語彙の学習にもつながる, ということが述べられた。英語多読は読者の自発性が重要なため, 教育現場で強制的に図書を読ませるような活動には限界があることについても言及され, この点に関しては誤解がないよう多読を推進する必要があるという慎重な意見も示された。

本講演は，講演者自身の英語の書籍を読むことに対する情熱や，多読を意識して出版された LR や GR の魅力について多くのことが伝わってくる内容の講演であった。本講演を通して，参加者は，英語多読に関して多くの示唆が得られたのではないかと感じる。

【文責：久保岳夫】

符号付きメタ言語フィードバックを取り入れた高校での自由英作文指導：理論と実践とその両立

講演者：　片居木 純太氏［栄光学園中学高等学校］
日　時：　2022 年 11 月 12 日(土) 17：15〜18：15
会　場：　オンライン ZOOM 開催

【概　要】

英作文指導の際、訂正フィードバックの与え方は多忙な教師を悩ます。本発表では、学習者および教師の両者に優しい訂正フィードバックとして「符号付きメタ言語フィードバック」をご紹介します。このフィードバック手法を取り入れつつ、「プロセスライティング」と「フォーカスオンフォーム」の考えを基にした私の授業計画と実際の授業実践をご紹介します。また、同フィードバックが学習者のメタ言語能力（明示的知識）と自由英作文の正確性（暗示的知識）に与える影響と、これら 2 変数間に存在する因果関係を調査した私の研究（「符号付きメタ言語フィードバックが高校生のメタ言語能力と自由英作文の正確性に与える影響」『第 33 回英検研究助成』）についてもご報告します。統制群を作らずに効果検証をする上で、私の教室環境と相性の良かった分析手法である「潜在曲線モデル」についても簡単にお話しします。英作文指導、第二言語習得、実践と研究の両立について一緒に考える機会となれば幸いです。

（ご参考）EIKEN BULLETIN vol.33 2021
https://www.eiken.or.jp/center_for_research/list_1X/33/

【司会者後記】

英作文の添削についてもどのようにしたら効果のある指導ができるかについて多くの方は、試行錯誤なさると思います。また、仕事（授業）と研究の両立は苦労が多いことと思います。片居木先生は、「符号付きメタ言語フィードバック」と「潜在曲線モデル」を用いて、ご指導と研究を見事に達成なさっています。

今回私たちが感服したのは、緻密で丁寧なご指導です。生徒の作文を分析し、「符号

付きメタ言語フィードバック」のリストを作成され、それを使って約 173 人ものすべての作文を複数回添削されました。研究者として、「統制群なしで効果検証が可能な研究手法はないか?」と考えられ、潜在曲線モデルを用いた英作文の縦断研究をなさいました。

先生の発表から引用させていただくと、このモデルは、「同じ学習者から、 一定の期間を置いて、 複数回集めた縦断データを分析し、 時系列変化から因果関係を探る、統制群を作らない、長期的変化の軌跡を追える、指導効果の個人差を推定できる(その個人差を生む要因も)、自由に変数を加えられる、2 つ以上の実験結果の因果関係を分析可能、欠損値があっても分析可能、教室環境の効果検証にむいている。」というものです。研究の結果は、メタ言語知識を向上させる可能性と英作文の正確性(可算性)を向上させたのではないかとまとめていらっしゃいます。詳しい内容はぜひ『「英検」研究助成報告』をご一読ください。

【文責：小林潤子】

Polysemy of the "E" : Perspectives from ELT, ELF, and Science Communication

講演者：　木村 大輔 氏［早稲田大学］
司会者：　肥田 和樹 氏［早稲田大学］
日　時：　2022 年 12 月 10 日(土) 17：15～19：00
会　場：　オンライン ZOOM 開催

【概　要】

In this talk, I explore the diverse conceptualizations of the "E" in ELT, drawing from my own previous research on English-medium study abroad in Thailand (Kimura, 2019), English as a lingua franca communication (Kimura, 2020, 2021), and interactions in microbiology research meetings (Kimura & Canagarajah, 2020). While the E obviously stands for English, learners, teachers, and other stakeholders orient to it in quite variable, and at times, conflicting manners. The term English today represents various images and values associated with domains such as Anglophone countries, British and American literature, entertainment, intercultural communication, and academic research. Conceivably, this "polysemy" of the E bears critical implications for ELT since misaligned orientations can give rise to tensions that may hinder learning/teaching. As such, the questions of "what is English" and "why we learn, teach, and research English?" are of heightened importance for us in the ELT profession. To facilitate discussions about this important issue, I present synopses of my previous studies and first-hand experiences as an English learner, teacher, and researcher to highlight the tensions between different conceptualizations of the E. It is hoped that this presentation will serve as a springboard for continued reflections in pursuing improved alignment of orientations among the stakeholders involved and in helping learners become globally competent users of English who can communicate their ideas effectively to diverse audiences.

Works cited

Kimura, D. (2019). “Seriously, I came here to study English”: A narrative case study of a Japanese exchange student in Thailand. *Study Abroad Research in Second Language Acquisition and International Education, 4*(1), 70-95.

Kimura, D. (2020). Enacting and expanding multilingual repertoires in a peer language tutorial: Routinized sequences as a vehicle for learning. *Journal of Pragmatics, 169*, 13-25.

Kimura, D. (2021). Cooperative accomplishment of multilingual language tutorial: An intercultural pragmatics study. *The Modern Language Journal, 105*(3), 655-678.

Kimura, D. & Canagarajah, S. (2020). Embodied semiotic resources in Research Group Meetings: How language competence is framed. *Journal of Sociolinguistics, 24*(5), 634-655.

【司会者後記】

ご講演者の実体験や研究を通して、English language teaching (ELT)における“E”とは何を意味するのか、について改めて考える素晴らしい機会となりました。講演では、①タイへ留学した日本人大学生について②ご自身と論文査読者とのやりとりについて③英語使用環境における空間レパートリーの役割について話されました。

私は特に、タイへの日本人留学生のお話しを聞いて、“E”に対する接し方について改めて考えることができました。その学生はネイティブの英語への憧れを抱いており、英語を“英語を話す”コミュニティの言語と捉えていたそうです。“英語”といっても皆が同じ意味、イメージを共有しているとは限らないため、“英語”に対する認識のずれが、学習に深刻な障害を引き起こす可能性があることについて述べられました。

教員として学生に“英語”を教えるときに、どのように“英語”捉え、どのような“英語”を教えるのか、また学生はどのような認識を抱いているのか。“英語”指導は教員だけが行うものでなく学生との協働作業であることを、再認識するとともに、英語学習者として、今後どのような“英語”と、どのように、接していくのか、改めて考える素晴らしい機会となりました

【文責：肥田和樹】

KLA・TALK 第 21 回合同セッション

発表者：　久保 岳夫 氏（TALK）［開成学園 講師］
パネリスト：　山村 公恵 氏（KLA）　戸田 博之 氏（KLA）
黒川 智史 氏（KLA）　深田 芳史 氏（KLA）
日　時：　2023 年 3 月 4 日(土) 14:00～17:00
会　場：　オンライン ZOOM 開催

【発　表】

【発 表 者】久保 岳夫 氏
【発表題目】AI 技術がもたらす外国語教育実践への影響の考察：実践例の紹介と教員の反応
【発表概要】

AI 技術を駆使したサービスが注目を集めている。2022 年末に登場した OpenAI 社の対話型 AI の ChatGPT をはじめ、ユーザーの質問に対して検索結果を要約して示す Perplexity, テキストを任意の声や感情で音声に変換できる ElevenLabs 社の Prime Voice などの登場によって今後の教育実践方法が大きく変わるのではないかと、期待や不安がささやかれている。本発表では、こうした AI 技術が教育実践へ及ぼしうる影響について、具体例を参照しながら考察し、現段階での学校教員等の反応についてまとめる。

まず最初に、現在公開されているいくつかの AI 技術を利用すると、どのようなことが可能であるのかを概観し、AI が得意なことと苦手なことについて事例を見ていく。また、発表者自身が AI 技術を用いて作成した教材やインターネット等で公開されている実践（案）の例を紹介し、現在の AI 技術を教育に応用して得られる利便性について考察する。次に、現在世間で最も話題になっていると思われる ChatGPT に対する教員の認知度と反応を概観し、その異なった反応にどのような意味が込められているのかを考察する。

最後に、AI 技術が教材作成に与えうる影響について、「創造性」という観点を考察する。外国語教員の多くは、テキストに掲載された文章など既存の言語材料を利用して補助教材（配布物など）、小テスト、定期考査などを作成することが一般的であることを考えると、教材等の作成は「材料探し」から「加工」という手順を踏むのが一般的であると言える。AI 技術を利用すれば、今後はこの教材の「材料探しの幅」と「加工の幅」が大きく広がり、

書き下ろし教材作成のような、より創造的作業にまで時間を割り当てることのできる教員が増えてくるのではないかと考えられる。こうした創造的な教育作業に従事する際の注意点についても検討する。AI 技術は今後，教員の優秀なアシスタントとなり、教育の質を向上させる可能性がある。

【パネル・ディスカッション】

【パネリスト】山村 公恵 氏、戸田 博之 氏、黒川 智史 氏、深田 芳史 氏
【司　会　者】河内山 晶子 氏
【テ　ー　マ】博士論文 : 2021 秋以降に学位を取得された 4 人が語り合う「博論完成への道のり」

【発表概要】

KLA のガリー先生は、本年度 3 月に東京大学をご退官ですが、この 2 年あまりの間にガリーゼミから 4 人の方々が、博士号の取得を達成されました。その長い道のりを語り合い共有することが、現在あるいはこれから博士論文に挑戦しようという方々にとっての有益な糧になればとの趣旨で、パネル・ディスカッションを開催いたします。

このパネル・ディスカッションの趣旨は、博論執筆過程での奮闘ぶり、すなわち、「各パネリストが執筆中に遭遇した様々な問題を、どのようにのり越えて博論完成に至ったのか」を浮き彫りにすることです。その理解を深めるためには、各研究についての概要を知っておくほうがよいと思われますので、まず初めに、お一人 5 分程度で、ご自分の研究を簡潔に説明していただき、その後、司会者からの質問をもとに議論を展開していきます。Q&A タイムはフロアからの活発なご発言をお待ちしております。

各パネリストの博士論文題目は以下の通りです。
博士論文題目（提出順）

山村公恵（2021.9）
Alloplastic amalgamation of linguistic occurrences: A non-anthropocentric qualitative study at a science resource center（言語現象の異種形成性に関する考察：科学実験支援施設における非人間中心主義的アプローチを用いた質的研究）

戸田博之（2022.1）
国際ビジネスにおける実効的コミュニケーションを成立させる能力モデルの構築 ―効果的で適切な英文ビジネス E メールライティングに注目して―

黒川智史（2023.1）
大学入試における「英語で話すこと」の考察―英語民間試験導入経緯を中心に―

深田芳史（2023.1）

International Students' Co-construction of TL-mediated Socializing Opportunities in Their Affinity Spaces: A Longitudinal Situated Qualitative Study

（親和空間における留学生の目標言語を介した社会的やり取り機会の相互構築:縦断的状況証拠に基づく質的研究）

EdTech を使ったリスニングとスピーキング指導と学習：自律した学習者の育成のための EdTech 活用と ChatGPT の活用の可能性

講演者：　斎藤 裕紀恵 氏［中央大学国際情報学部 准教授］
司会者：　小林 潤子 氏［駒澤大学 非常勤講師］
日　時：　2023 年 3 月 25 日(土) 17：15〜19：00
会　場：　オンライン ZOOM 開催

【概　要】

大学入試へのスピーキングを含む英語 4 技能入試の導入に関しては頓挫したが、加速する情報化社会で英語をコミュニケーションツールとして学ぶ必要性、また 4 技能を学ぶ必要性は変わっていない。また Covid-19 禍、英語の授業を提供し続けるためにも ICT の活用が不可欠であることが明確になった。英語 4 技能学習を効果的に進めるためにも積極的な EdTech（Education×Technology）の活用が期待される。本発表では英語のリスニングとスピーキングの背景にある第 2 言語習得理論、理論と関連付けながらリスニング力とスピーキング力向上のために利用できる EdTech サービスやツールを紹介する。

教室内で週に一度だけ英語を学ぶだけでは、英語学習としては十分ではない。また日本は英語を外国として学ぶ EFL 環境であるが、EFL 環境では日常的に英語に触れることができる機会は限られている。しかしながら、TED talk を毎日聞く、オンライン英会話で毎日英語を話すことによって、EFL 環境でも英語に日常的に触れることが可能となる。その点からも EFL 環境で英語に頻繁に触れるためにも EdTech を効果的に使用することが期待されている。また学生が自宅でも EdTech を使って自分で英語学習をすることができれば、学習者の自律性にも繋がる可能性がある。本発表では EdTech を使った学習を通しての自律した学習者の育成についても提案する。最後に Open AI が提供する生成 AI の技術を使用した ChatGPT の教育への利用が議論となっているが、自律した英語学習の育成のために、どのように ChatGPT がリスニングとスピーキング指導と学習に利用できるかについて検討する。

規　約

TALK 規約

［2015.4.18 改訂］

1. **名称**：　TALK (Tanabe Applied Linguistics Kenkyuukai)
(田辺英語教育学研究会)

2. **目的**：　・英語教育及び関連分野の理論と実践
・日本の英語教育の改善・進歩発展・方法の開発

3. **理念**：　(a) 自己の研究発表を通し，その研究内容を再確認する研究活動をする
(b) 自己の研究に対する各会員の専門分野からの意見を聞き，討論を重ねることによって新しい知見を得る研究活動をする
(c) 各自の専門分野での知見や新情報を会員相互に伝える活動をする
(d) さまざまな研究分野の会員が自分の持てるものを生かして研究を重ね，併せて会員の知識を増やし見識を深める一助とする研究活動をする

4. **会員**：　・一般会員（本研究会員及び趣旨に賛同する者）
・名誉会員（顧問経験後の退職者。名誉会員は会費不要）

5. **会費**：　年会費：3,000 円
会計年度は 4 月 1 日から翌年の 3 月 31 日までとする

6. **組織**：　各部署の担当者には 1 名の責任者を置く。任期は 1 年。再任は妨げないが，持ち回りが望ましい

【会　　長】本研究会の代表者
【顧　　問】本研究会の協力者

以下の各部署の担当者には 1 名の責任者を置く。任期は 1 年。再任は妨げないが、持ち回りが望ましい

【幹　　事】発表者や司会者の依頼を含む，研究会の行事・運営に関わる調整，および会全体のまとめ役
【事　務　局】会に関わる諸行事の連絡・出欠確認，名簿作成・更新を含む事務一般
【会　　計】予算決算の報告，一般会計，諸行事の会計
【庶　　務】諸行事の会場確保，会当日の鍵や機材の管理 等
【研 究 企 画】月例会（研究発表・読書会 等)・合宿等の企画案作成および運営

【年 次 大 会】年次大会(夏合宿)の企画および運営
【紀要編集委員会】各研究会の後記および研究会誌の原稿依頼・校正・編集
【ネットワーク】ホームページ・メーリングリストの管理・運営

7. **活動内容**：
- 原則として月１回研究会を開く
- 発表者は発表要旨を，司会者は司会者後記を執筆する
- 各活動内容を月刊報告としてホームページ上で公開する
- 定期的に研究会誌『Dialogue』を発行する。『Dialogue』には，「年度活動報告」，および投稿規定（別に定める）に従って「研究論文」「実践報告」「書評」を載せることとする
- 研究書の出版，教材の開発

8. **その他の活動**：
- 夏期休暇中の研究会は合宿の形をとることとする
- 年１回４月に総会を開く
- 本研究会の目的に沿った外部の行事にも，必要があればTALKとして参加する

以上

■上記規約に基づき、2022年5月～2023年4月「組織」の担当者（TALK運営委員）が2022年4月23日の総会で以下の通りに承認されました。（敬称略　○は責任者）

【会　　長】　松坂 ヒロシ
【顧　　問】　折井 麻美子　澤木　泰代　中野　美知子　原田　哲男
森田　彰　矢野　安剛
【幹　　事】　○浅利 庸子
【事　務　局】　○安田　明弘　鈴木　久実
【会　　計】　○北野　功祐
【庶 務 広 報】　○須能 麻衣花
【研 究 企 画】　○小林　潤子　久保 岳夫　残間　紀美子　下川原　広樹
高橋　真由美　望月　真帆　山口　高領　湯舟　英一
【年 次 大 会】　○肥田　和樹　澤田　翔

【紀要編集委員会】〇杉内　光成　　久保　岳夫　　柳川　浩三　　山口　高領
【ネットワーク】　〇肥田　和樹

投稿規定・執筆要項

『Dialogue』投稿規定・執筆要項

■投稿規定

1. **発行回数**：年 1 回、発行する。
2. **投稿資格**：TALK の会員。(共著の場合には全員が会員であること)
3. **内容**：「研究論文」「実践報告」「書評」「年度活動報告」等を掲載する。
4. **分野**：英語教育学、応用言語学、およびこれらに応用できる分野。
5. **使用言語**：日本語または英語。
6. **論文の著作権**：本会に帰属する。
7. **査読・選考**：
   「研究論文」の採否は，研究会の定める査読委員が専門に応じて審査した後、TALK 紀要編集委員会が決定する。「実践報告」の採否は、TALK 紀要編集委員会が決定する。「研究論文」「実践報告」「書評」の採用原稿についても，分量の圧縮や一部書き直しを求めることがある。
8. **抜き刷り**：希望者には有料で行う。
9. **期日**：当該年度の 12 月末日（必着）までに投稿する。(投稿数が少ない場合は締切日を延長する場合がある。その際は会員メーリングリストで通知する。)
10. **原稿の制限**：原稿は未刊行のものに限る。

■執筆要項

1. **原則**：
   この執筆要項は、TALK が作成したものである。ここに記述がない事項については APA 第 7 版に従う。ただし「研究論文」以外は、編集委員会が認めれば、その分量や性質上、必ずしもこれに準じなくともよいものとする。

2. **構成内容**：

1)「研究論文」

論文題目、著者名、所属、要約、キーワード、本文、(注)、参考文献、(付録)の順とする。(　　) 内は随意。

2)「実践報告」

題目、著者名、所属、要約、キーワード、実践現場情報、本文、(注)、(参考文献)、(付録) の順とする。(　　) 内は随意。

3)「書評」

紹介する書名・論文名、書・論文の編者・著者名、出版年、出版社名、著者名、所属、本文、(注)、(参考文献)、(付録) の順とする。(　　) 内は随意。

3. **分量**：

「研究論文」は、20 枚以内、「実践報告」は 2 枚から 10 枚程度、「書評」は 1 枚から 4 枚程度とする。この分量には、上記「2. 構成内容」をすべて含むものとする。

4. **書式**：

※研究論文・実践報告・書評とも、TALK のホームページ (http://talk-waseda.net/dialogue/) にあるテンプレートを用いること。

以下、テンプレートの設定内容を記述する。

(a) Microsoft Word® を用い、B5 版 (縦) の横書きで作成のこと。

(b) 余白は、天地 25 ミリ、左右 20 ミリに設定する。

(c) 1 ページの行数は、33 行に設定する。(文字数は設定しないこと。)

(d) 英文原稿の場合、「Century」フォントを用い、題目・大見出し・小見出しには太字を用いる。日本文原稿の場合、題目・大見出し・小見出しには「ＭＳ Ｐゴシック」、その他は「MS 明朝」と「Century (括弧と数字の場合)」を用いる。

(e) 題目は、3 行目から中央寄せで書き、14 ポイントを用いる。「書評」の場合は、紹介する書名・論文名を題目として書く。研究論文・実践報告を日本語で書く場合は、題目の英文表記もつけること。

(f) 著者名・所属は 11 ポイントを用い、題目の下に 1 行空けて中央寄せで書く。それぞれ各 1 行ずつ用いること。複数の著者がいる場合は、第 1 著者・第 1 著者の所属・第 2 著者・第 2 著者の所属…の順に記載する。また、「書評」の場合は、紹介する書名・論文名、書・論文の編者・著者名、出版年、出版社名と記載したのち 1 行空けて書き始める。

(g) 要約は 9 ポイントを用い、所属の下に 1 行空けて 200 words 以内で書く。本文の言語を問わず英文とし、研究論文・実践報告の場合は必須とする。

(h) キーワードは 9 ポイントを用い、要約の下に 1 行空け，5 つ以内で記載する。

英語表記・日本語表記を併記する場合には、1 キーワードと数える。

(i) 実践報告の実践現場情報は 9 ポイントを用い、「科目名」「対象者とクラス人数」「学習の目標」を記載する。

(j) 本文の大見出しは 12 ポイントを用い、上下に 1 行空ける。算用数字で番号をつけてから大見出しを記載すること。(e.g. 1. ------)

(k) 本文の小見出しは 10.5 ポイントを用いる。上に 1 行空けるが、下は 1 行空けずに書き始めること。(e.g. 1.1 ------ / 1.1.1 ------)

(l) 本文は 10 ポイントを用いる。英文原稿の場合は各段落前に半角 3 文字分空け、日本文原稿の場合には各段落前に全角 1 文字分空ける。日本文原稿の句読点は「、」「。」を用いる。文中でイタリック体にすべき箇所はイタリック体にしておくこと。

(m) 注 (Notes) は 9 ポイントを用い、脚注ではなく、すべて本文の末尾にまとめて記載する。

(n) 参考文献 (References) は，10 ポイントを用い、本文・注などで言及したもののみ記載する。英文原稿の場合は、著者名のアルファベット順に一括して記載し、日本文原稿の場合は、英語文献をアルファベット順に記載した後、日本語文献を五十音順に記載する。

(o) 外国の人名、書名などを日本語で表記する場合、原則として初出の箇所で原名を示す。

(p) 図・表は本文中に貼り付けること。「表 1」(Table 1)、「図 1」(Figure 1) のように、算用数字で通し番号を記入する。表のタイトルは表の上に、図のタイトルは図の下に記入する。

5. **送付方法**：

投稿締切日までに、Microsoft Word® で作成したファイルと、それを PDF に変換したファイルを、メールで送信する。

注：最新の執筆要項は必ず TALK のホームページ (http://talk-waseda.net/dialogue/) で確認すること。

TALK 紀要『Dialogue』第 21 号

発行年月日	2023 年 3 月 31 日
編集・発行	TALK (田辺英語教育学研究会)
代　表　者	松坂ヒロシ
印　刷　所	株式会社リーブルテック
発　行　所	TALK 紀要編集委員会本部 〒169-8050 東京都新宿区西早稲田 1-6-1 早稲田大学商学部　浅利庸子研究室内
編 集 委 員	杉内光成　久保岳夫　柳川浩三 山口高領
事　務　局	e-mail : office@talk-waseda.net
ホームページ	http://www.talk-waseda.net/

ISSN　1349-5135